
ネギま！ 龍騎士が行く

キング・ブラッドレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 龍騎士が行く

【Nコード】

N0106X

【作者名】

キング・ブラッドレイ

【あらすじ】

気付いたら、俺は真っ白な空間にいた……………へ、ネギまの世界へ行け？

いや、意味わかんないんだけど！？

よく事情がわからない内に飛ばされた世界での一人の青年（？）の奮闘録！

この小説の主人公は魔法でなく、呪文を使います

プロローグ（前書き）

勢いで書き始めた小説ですが、完結目指して頑張ります！

ストックはある程度作っているので、ストックがある内は三日に一回の投稿でやっていきます

また、この小説には独自設定や独自解釈がありますのでご注意ください。

プロローグ

「んあ？」

突然だが、俺は渋谷川一輝。
普通の高校生だ。

.....自己紹介は置いて、気が付いたら俺は真つ白な空間にいた。

上も下も、右も左も真つ白。

「いじつに……」

見覚えがある。

だけど、“現実の世界”じゃない。

そう考えていると、突然背後から声をかけられた。

よう。

!!

やっぱりそうなのか……

そこには人の形をした光が地面（？）にあぐらをかいて座っていた。

そして、人型の背後には逆さまの木 セフィロトの樹 が彫り込んである扉が浮いている。

……嫌な予感しかしねえ

「…………誰だ？あんだ？」

一応聞いてみるか。

『おお！よくぞ訊いてくれました！』

やっぱり予想通りというか、人型はその質問に嬉しそうに反応する。

そして、ゆっくりと謳うように言葉を紡ぐ。

『オレはお前達が“世界”と呼ぶ存在

あるいは
“全”

あるいは
“真理”

あるいは
“神”

あるいは
“宇宙”

あるいは“—”

そして

オレは“おまえ”だ』

“真理”はゆっくりと俺を指しながら言い放った。

『ようこそ

運命にその身を弄ばれるバカ野郎』

………ん？コイツとんでもない事言わなかったか？

『突然だが、お前には“ネギま！”の世界へ行つて貰う。』

「はぁ!?!」

いやいやいやいや!

それってマンガの世界だよな!?

名前は聞いたことあるが、内容全然知らんし!

普通、真理君(?)が居るんだからハガレンじゃないの!?

『時間が無いから、いくぞ。』

え?

「ねえ、持ち物は!?!装備は!?!ちよつとちよつと!?!」

ギイイイイイイ……………

テンパってる間に扉開いてるし!!

いやああああ!!

ワサワサした黒い手がいっぱい!!

『 武運を祈るぜ。 』

祈るって誰に!?

お前より上位存在居るの!?

そう叫ぼうとしたところで意識が暗転した。

ブログ（後書き）

ブログはこんな感じです

細かい説明を受けずに理不尽な飛ばされ方をした一輝の運命は？

登録をしていない方でも感想を書けるようにしてあるので、感想や意見待ってます

第一話（前書き）

プロローグだけだと物足りないのもう一本

魔法のまの字も出ないです

第一話

目が覚めるとそこは、夜の森の中開けている場所だった。側で焚き火が燃えている。

とりあえず起き上がるが、クラクラする……。なんか背が低くなってるし。

「クソ……あの真理の野郎……今度会ったらぶっ飛ばす……」

いきなり訳のわからん場所に飛ばすとか理不尽過ぎるぜ……ちくせう。

まあとりあえず、状況確認だ。

今は夜で、周りに動物の気配は無い、側に在るのは革製の袋のみ。どうしたものか……。

「そういえば、何故に旅人の服？」

何故か服装がドラクエ装備だし。

いや、ドラクエ好きだったからいいけどさ。動きやすいし。

「それじゃあ、この袋は……？」

まさかと思い、おもむろに中に手を入れて中を探してみると、やっぱり出てきたのはお馴染みの薬草だった。しかも、出るわ出るわ数えてみたら99「……………」。

「中の構造どうなってんだ？毎回思うが、絶対普通じゃ入りきらないよな……………」。

ぶつくさ呟きながら、中ものを全部出してみたら、

- ・薬草×99
- ・キメラの翼×（恐らく）
- ・眼帯×5（？）
- ・食料（沢山）
- ・銅の剣×5
- ・鋼の剣×3
- ・鋼の鎧×1
- ・鋼の小手×1
- ・鋼の盾×1

こんな感じ。

剣が沢山あるの？とか何故に眼帯？とか、この森安全なのか？とか色々気になるがとりあえず、寝る。

「明日は水場の確保からだな……………」。」「こうして、色々な不

安の中、俺の異世界（ネギま！）ライフが始まった？

朝です。

おはようございます、俺です。

朝起きて、昨日のうちに水場を探しとおけばよかったと後悔しました。

……………顔が洗えません。

仕方無いので眠気が覚めるまでごろごろしてから、小ぶりで取り回しのいい銅の剣を持って袋を腰に着けて探しに行きます。

んで、銅の剣で道を切り開きながら歩いて5分程の場所に水質の良さげな川を発見。

水場を確保！ってテンション上がり過ぎて、そのまま服を脱いで水浴びをする。

ここで、気付いた事が幾つかある。 水を鏡代わりにして見たんだが顔は黒髪は相変わらずで、左目は紅色になっていた。

んで、右目が……………キング・ブラッドレイと一緒にウロボロスの印が出ている最強の眼です。

ああ、その為の眼帯か。

歩いて来るとき、何故か風の流れが見えている気がしたのはコイ

ツの所為っばい。

「ん？そしたら、身体は……………」

まさかと思い、恐る恐る銅の剣で指の先をちよつと斬つてみる。
錬成反応が出て元通り。

「あちゃー。ホムンクルス 人造人間か……………」

不死じゃ無いだろうけど、不老なのか？

今の肉体年齢13歳程度なのだが……………。このままとか、「冗談じゃないぞ。

水浴びを終えてとりあえず、焚き火の場所に戻り今後の方針を考える。

色々考えて、暫くはここを拠点として剣の鍛練をことにした。
森の外の様子も気になるが、今ノコノコ出てって魔物とかいたら
ホムンクルス 人造人間だからと言ってもつらいだろう。

幸いにも、元の世界ではちよいと剣術を齧っていたので、丁度いい。
てか、この身長で鋼の剣を振り回すのってシユールだな！

そういう訳で、寝る時と食事の時以外は鍛練をする生活が始まった。

そんなこんなで、1ヶ月程経ったと思う。カレンダーなんざ無し、毎日やる事は一緒なので日にちの感覚は無くなった。最初は以前（生前？）使っていた木刀の片刃と鋼の剣の両刃の勝手の違いに悩まされたが、使いこなせる様になった。

しかもこの肉体のスペックが素晴らしく、重い筈の鋼の剣が片手で軽々と取り回せる。

ウロボロスの目は風の向きや動きなどが見えるが、脳への負担が多少あるらしく、最初は数分間意識して使うだけでも頭痛がしたのもう慣れた。

まあ、不気味過ぎるから人前では眼帯をするけどね。

それと、薬草を増やすために薬草にこびり付いている種で栽培（？）なんかも試してみた。

こつちもこつちで凄まじく。適当に耕して、埋めると二週間程で1メートル程の薬草の葉になる木になった。雑草より強靱だぞ、これ。薬草の葉を採っていくと偶に上薬草も見つかった。恐らく、上薬草は薬草より充分な養分を吸収したら出来るのだろっと思う。

そして、気になる点が一つ。行動範囲を広げようと川へ向かうのとは逆方向を散策していたら、何かが通ったかのように木々が薙ぎ倒されていて、地面には大きな人間らしきモノの足跡が付いている所が幾つかあった。

足跡は全て一方向へ向いていて、辿つていくと終着点には巨大な洞窟があった。……嫌な予感しかしねえ。

とりあえず、洞窟の怪物は無視して鍛練を続ける事にした。

そして、ある日恐れていた事が現実になった。

「おいおい……マジか。」

「……!!」

水浴びの帰り、遂に怪物と鉢合わせしてしまった。
怪物は一角に大きな一つの眼に青い肌の巨人……。

「ギガンテスじゃん。」

棍棒は持つてなかったりと、所々違うがな。だが、筋肉ムキムキのマツチヨな点は一緒。

とりあえず、

「三十六計逃げるに如かず!!」

「!!!!!!」

一旦戦術的撤退をする。

ここで戦うのはベースキャンプ（仮）が近くにあるので、不味い。何より、防具も剣も何も装備してない。

キャンプと逆方向に全力で逃げつつ、籠手を着けて鋼の剣と鋼の盾を持つ。鎧は悲しい事に、身体にまだ大き過ぎて合わない。ギガンテスモドキの歩く速さは遅い様なので、助かった。

「さあて……行きますか!!」

俺は頬を叩き気合いを入れて、ギガンテスモドキに向かって疾走した。

第二話（前書き）

二話です

いきなりの戦闘回

第二話

side
ロト

「クソッ！！コイツ強え！！！」

「
！！！」

ギガンテスモドキに挑んだがいいが、如何せん手強い。
素早さはそこまで早く無いが、力が恐ろしく強い。しかも、タフで斬っても怯みもしないで腕を振り回すから質が悪い。

まだ一度も攻撃を食らってないが、当たったら只では済まないだろう。最悪ミンチだ。

“死に難い” 身体だが構造は一緒の為、痛いものは痛い。

「ちいつ！！！！効いてない様だな！！！」

「
ッ
！！！」

足を斬り続けてみるが、効果があるようには見えない。

ギガンテスモドキが両手を合わせてオルテガハンマーの様に振り下ろす。俺はギリギリのラインを見切って躲し、そのまま腕を駆け上がる。

「オラァ！！！」

ザシュ！！

「ッ！！！」

そのまま剣を振り回しながらギガンテスモドキの身体を一気に駆け上がる。

肩に到達した所で目に剣を突き刺そうと跳躍したが

「なっ！？」

「！！！」

ドゴンッ！！！！

「ぐっ……」

顔を逸らして避けられ、そのままヘッドバッドを食らった。
咄嗟に盾で防いだってのになんつつ威力だ？腕が逝きかけてら…
…。

「これじゃあ、盾の意味がねえなっと!!」

「 ッ !？」

盾は放棄して、ブーメランの要領で目を狙って投げると見事命中したが、目を庇いながら暴れ始めた。

「ああクソッ!!!!大人くしてろ!!」

動きが大振りになったが、完全に適当に手足を振り回しているだけだから動きが読み切れない。

一旦背後に回って !？」

ゴガン!!!!

「がふっ!!」

クソッ……振り回しているだけの腕にクリーンヒットは笑えないぜ……

頭から地面に叩きつけられた。これで一回死亡。肉体がボロボロだ。直ぐに再構築されるから問題ないが

「あーあマズい、脳震盪だ。」

脳が揺らされて、周りの景色がぐにゃぐにゃになってる……こりゃ、ヤバイ。

「……………」

ギガンテスモドキが目潰しから復活したようだ。
こっちもある程度治ったが踏み潰されたら再生に時間が掛かるし、その間にメッタメタでENDだな

なら選択肢は一つ。

「躲す。」

感覚を研ぎ澄ます

突破口を決じ開ける

駆ける

「先手必勝!!」

疾風の如く

「疾風突き!!!」

ズブシュ!!!

「
ツツ!?!」

「うおっ!？」

ギガンテスモドキの攻撃を躲して突きさした鋼の剣は深々と腹に刺さったが、ギガンテスモドキは大きく暴れ始めて振り落とされた。

それでも効かないのか!？

とりあえず、今のうちにもう一本鋼の剣を袋から取り出して様子を伺う。

もうカウンターはゴメンだ。

「……………」

落ち着いた(？)ギガンテスモドキは腹から剣を抜いて握り潰した。絶対掴まりたくないな…………。

そして、くると振り返ってどこかへ歩いていく。俺を放って巢に帰るみたいだ。

俺もこれ以上戦いたくないから追わないがな。とりあえず、

「疲れた……………」

粗方治った肉体の再構築を中断してその場に寝転がる。傷が残っているところは薬草を貼ろう。

今日はギリギリ引き分けだったが、余裕で勝てるぐらいにしなき

やな。明日から、また鍛練だ。

「収穫もあつたしな。」

きつかけは偶然だけど、疾風突きが使えるようになった。疾風突きが存在するなら、他の剣技も有るだろう。

これで技を覚える楽しみも出来るし、一石二鳥だ！

ギガンテス（モドキと付けるのが面倒になった。）との初戦から約半年経った。鍛練とギガンテスとの実戦の繰り返しで遂に……

「完全勝利！！」

一撃も食らわずに倒せた！！

あれから使える様になった剣技は隼斬りだけだが。王者の眼にも完全に慣れた

てか、この眼は魔力とかも見えるんだな。

とりあえず、ギガンテスは倒した（気絶してるだけで死んでない。恐ろしい程頑丈だよコイツ……。）ので気絶している間に、ギガンテスの住みかの洞窟の中に入ってみる。

中には大きな骨があちこちに転がっていて、獣の匂いがする。焚き火の跡とかもあった。正直、あの脳筋に火を燃やす技術がある事にびっくりだな。更に奥に進むと一番奥に台座が在って其処には一振りの剣が刺さっていた。

「これは……隼の剣！」

隼の剣は簡単に台座から引き抜けて、柄の部分が吸い付くようにフィットして、本当に羽の様に軽かった。

ギガンテスからはいい剣を（勝手に）譲り受けたな。

それで、俺はこの森を出て外へ行ってみようと思う。

自分で言うのもどうかと思うが、ギガンテスと鍛えて実力も着いたし賞金稼ぎ《バウンティハンター》でも、始めてみる。

その為に必要なのは…………

「名前、だな。」

多分、和名じゃ訝しがられるだろうし生まれ変わったみたいなんだしな。

名前はキング・ブラッドレイでもいいけどここはドラクエから取って、

「 ロトにしよう。」

ロト・ドラゴニクスだ。」

ロトは言わずもがな。ドラゴニクスはドラゴンクエストをちょっと文字ってみた。

「…………もうここでやる事はないな。」

ギガンテスも倒したし、薬草の木からは、また生えるだけの量を残して、葉を取れるだけ取った。

「いくか…………。」

俺はそう呟くとギガンテスの森を跡にした。

もしかしたら、俺 ロト・ドラゴニクスの人生はここから始
まったのかもしれない。

第三話（前書き）

三話です

賞金稼ぎとしての話

第三話

Side
ロト

ギガンテスの森を出た俺はヘラス帝国なる場所に着いた。ここを賞金稼ぎの拠点にしようと思う。

賞金稼ぎにはギルドが有るようだが、とりあえずフリーランスでやって行くことにする。

どこかのギルドに入ってもいいが、賞金稼ぎを専門職にして食って行こうとは思ってないので、止めておく。

「おい坊主！ここはガキの来るところじゃねえぞ！」

近くにあったギルドに入り、フリーランス向けの提示板を眺めていると何処かのゴロツキにしか見えないオッサンが絡んで来た。まだ昼間だったのに酒飲んでるし。

まあ、賞金稼ぎのギルドに子供が入ってきたら疑問に思つか。

「何か問題が？」

「っ！ーい、いや……何でもねえ。」

少し殺気を込めて威圧したら、大人しく引き下がった。何か周りの大人も感心した様にこっちを見ている。

「とりあえず、手堅いところ……………」。

30万ドラクマの賞金首の依頼の紙を取ろうとした隣に物凄く気になる依頼があつて、固まってしまった。

・キュクロープスの討伐

場所：タルタロスの森

報酬：200万ドラクマ

「……………」。

キュクロップスって絶対あのギガンテスの事だよな……。あれってかなりランク上だったんだ。

「これで頼む。」

「はい。30万ドラクマのアブドミナル・ゼーレーヴェね。頑張つてね、坊や。」

「ああ。」

まあ、依頼を変える積もりは無いがな。

巨人と普通の人間サイズじゃ勝手が違うし。同じ200万ドラクマの人間を相手にして絶対に勝てる自信は無い。

何はともあれ、

「いくか……。」

「アブドミナルと後は、判るな？」

「はっ！ーガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜっ！ー！」

ゼーレーヴェはそう言い放つと懷から杖を取り出した。

「魔法という奴か……………」

後は、判るな？」

「はっ！ーガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜっ！ー！」

ゼーレーヴェはそう言い放つと懷から杖を取り出した。

「魔法という奴か……………」

俺は、背中に刺してある隼の剣を鞘から抜いて疾走する。距離は15メートルぐらいか。

「集い来たりて敵を撃て！連弾・炎の26矢！」

ゼーレーヴェは炎の矢を放って来るが、

「……………遅い。」

「んなあ！？」

俺は持ち前の動体視力で全ての矢を見切り、光弾の間をすり抜けるようにして躲す。

身体が小柄な事もあり、躲すことは容易だ。

「クソッ！ 集い来たり」 疾風突き！」ぐえ！」

「安心しろ。峰打ちだ。」

「フリーランスは辛いよってか……………」

ゼーレーヴェをしょっぴいてギルドに戻ったが、貰えた報酬は1
8万ドラクマだった。

仲介手数料やら何やらでフリーランスの賞金稼ぎはギルドに4割
渡すんだと。

「やっぱりどつかのギルド入ろっかな……………」

正式にギルドに入れば、報酬丸々貰える様になるらしい。子供の
を雇うギルドが有るかどうかが疑問だが。

それはさておき、

「魔法を使ってみよう！」

なけなしの金で初心者向けの魔法の本と練習用の杖を買って、タ
ルタロスの森に来ています。王者の眼で確認したところ、俺は
魔力はかなりの量を保有しているみたいなので魔法が使える筈！

「えっと、一番簡単な魔法は……………プラクテ・ビギナル 火よ灯れ
！」

……………火は出ません。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

.....。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯r（ry）」

「プラクテ・ビギナル 火y（ry）」

（2時間後）

「ぷ、プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

（四時間後）

「グスッ……プラクテ・ビギナル 火よ灯れえ!!!!!!」

灯れと言うか、灯ってください！

結局、この日一回も灯りませんでした。orz

一週間経ったけど、根気良くやっています。未だに火は灯ってないです。んで、少しやり方を変えてみる。

今までは詠唱中に魔力を込める感じでやっていたけど、詠唱の前に魔力を込めてみる。

「（目をつぶって、魔力を引き出す……………」

充分だと感じたところで、目を開けてみると。

「……………何コレ。」

魔法は発動した様子。だけど、金色に輝く古代文字のようなのが俺の周りを漂っている。んで、唐突に出てきた呪文の発動キ！。

「《メラ》」

ドゴンッ！！！！

「うおっ！？」

唱えた瞬間、火の玉が飛び出て地面に着弾すると人の大きさ程の火柱になった。

「ドラクエの呪文は使えて、この世界の魔法が使えないってトコか？これは？」

その後も色々調べてみたが、やっぱり魔法は使えなかった。呪文は全属性の呪文が使えるには使えたが、色々と差異があった。とりあえず、収穫があったので意気揚々と一週間振りに街に戻ろうとキメラの翼を使おうとした所に。

ガサッ

「ん？」

「キュエー……………」

バタッ

「お、おい！」

物音がして音の方向を見ると、そこに居たのはケガをしてキズだらけの竜の雛だった。

「えっと、とりあえず……………《ホイミ》」

ホイミで傷を癒すが、まだ未熟で適正も無い為、余り回復しない。しょうがないので、薬草を傷の部分に貼りつけて袋から食料の干し肉を取り出し、口先に近付ける。

「ギ……………ギユエー……………」

「いいから食え。」

威嚇するような仕草をしたが、それに構わず干し肉を押しつけると、観念したのか食べはじめた。それと、川から水を汲んできて飲ませる。これで大丈夫だろ。

「あとは、自分で生きろ。」

ギガンテスもここには近寄らないだろうしな。

俺は竜の雛が眠っているのを確認したキメラの翼を放り投げて街に戻った。

今、俺は賞金首を追って街の外を外を歩いている。

竜の雛を助けてから2日経った。調べてみたら、あの竜は黒龍という龍の雛らしい。

黒龍は龍種の中でも上位に位置する存在だと言つ。
親に見つかっていたらどうなった事やら……………。

「キュエー!!」

そんな事を考えていたら、空から何か降りてきた。
と、いつか……………

「お前!この前の雛か!？」

「キュイ!」

一昨日助けた竜だった。礼でもいいに來たのか？

「あー礼はいいから。頑張つて生きろよ。」

俺はそれだけ、言ってさっさと歩き出すがクロスケ（仮）は後ろ
を着いてくる。

「なんだ？まだ何か有るのか？」

「キュエー!!」

クロスケ（仮）はまた一鳴きするだけ。ん？もしかして、

「お前、一緒に着いてきたいのか？」

「キュイ！キュイ！」

クロスケ（仮）は首を振って反応する。お前言葉解ってんのか？

「はぁ…………じゃあ行くぞ。」

「ギューー！」

このまま押し問答しても無駄だろうし、黒龍なら戦力になるだろう。

クロスケ（仮）は嬉しそうに鳴いて後ろを着いてくる。

奇妙な道連れが出来たもんだな…………。

余談だが、賞金首をしょっぴいてギルドに戻ったら後ろを着いてくる黒龍の雛を見て物凄くびっくりされた。

第三話（後書き）

こんな感じでした

次回は設定を載つけます

第四話（前書き）

賞金稼ぎと言うなのであの人とは戦う事になる訳で……

誤字修正しました

第四話

side
ロト

こつちの世界に来てから、何十年か経った。

結局、賞金稼ぎとしてひたすら賞金首を捕まえてきた俺には、いつの間にか、二つ名が付けられていてかなり有名になっていた。その名も“隻眼の竜騎士”

他にも“呪文使い”《スペルマスター》やら“ドラゴンライダー”なんてのもある。厨臭え…………。

竜騎士ってのは、黒龍のドランを連れているからだろうな。

それと、あの黒龍は名前はドランにした。

ドランも立派に成長して、まだ成体では無いだろうが、かなり大きくなった。

俺を乗せるには十分な大きさなので目的地に行くときには重宝している。

それで、今俺はアフリカに居る。ドランは流石に連れてこれなかった。

対峙するのは妙齢の女性と人形。女に手を上げるのは趣味じゃないんだが……この依頼、受けなきゃよかった。

「“闇の福音”エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだな？」

「そうだが、貴様は何者だ？」

「賞金稼ぎ《バウンティハンター》ロト・ドラゴニクス。」

「！！　ほう！“隻眼の竜騎士”がこんなガキとは思ってなかったぞ！」

「ほつとけ。実力と年齢は関係無いだろ？」

実際は50年以上生きてるしな。
因みに、外見年齢は16歳ぐらいだ。

「フツ、違いない。では、行くぞチャチャゼロ！」

「アイサー、御主人。」

その一声で戦いの火蓋が切られ、人形が武器を持って斬り掛かってくる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンは前衛を人形に任せて魔法の詠唱を始める。俺も人形を相手にしながら、マルチタスクで魔力を貯めて呪文の発動準備に入る。

「魔法の射手・闇の34矢!!」

「《ドルクマ》!」

人形の相手をしながら、魔法の矢を闇の呪文で相殺。

「魔法の射手 連弾 闇の299矢!!」

人形が離脱し、間髪入れずに生じた魔法の矢が殺到する。

俺は避ける事はせず、前傾姿勢を取りながらエヴァンジェリンに向け疾走し、魔法の矢は確実に当たるのだけを王者の眼で見切って隼の剣で落として行く。

「なにっ!?!」惚けてていいのか?」クッ!!」

俺の行動にエヴァンジェリンは驚いた表情をする。俺が接近し斬り掛かるうとしているのを見て、慌てて空へ飛んで回避しようとするが、甘い。

「飛べやしないが、跳べるんだぜ？」

「!？」

純粹な身体能力だけで跳び上がり、メラ系統の力を載せた隼の剣で斬り掛かる。

「
火炎斬り!!」

「氷盾!!」

不意を突いた積もりだったが、相手は何百年も生きた吸血鬼。障壁を出して防ぐ。

「相殺されたか!」「オレヲ忘レテンジャネエゾ!」「チイツ!!」

地面に着地した隙を狙って人形が斬り掛かってくる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンが詠唱を始めとそれに伴い、掌には高密度の魔力が収束していく。上位魔法か！

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみえいえんのひょうが」

俺もそれに対応するために魔力を掻き集める。
そして

「おわるせかい！！」

「燃やし尽くせ！！《メラゾーマ》」

ぶつかり合った氷の魔法と炎の呪文が大量の水蒸気を生み出し、お互いの姿を隠す。

だが、俺には右目の王者の眼がある。空気の流れを読み、エヴァンジェリンと人形の居る方向に爆発呪文をたたき込む。

「はぜろ。《イオナズン》」

ドゴオオオン！！！！

魔力による大爆発が起こり、大音量が鼓膜を襲う。しかし、間髪置かずにナイフが俺の顔面目がけて飛んできてきた。

ザシュ

「グッ……………」

咄嗟に左腕をかざして防ぐ。煙が晴れると無傷では無いが、重傷があるわけでもないエヴァンジェリンと人形が見えてきた。

s i d e o u t

s i d e エヴァンジェリン

クッ！油断をした訳では無いが、相手の行動が普通の相手とは違うからに遭りにくい。それに…………

「…………その眼はなんだ？魔眼の一種か？」

右目の眼帯の下にあった眼には黒目の替わりにウロボロスの印が刻まれていた。

「ん？　これは言うなら……………“最強の眼”だ。」

そう言つて、“隻眼”の龍騎士は不敵に笑う。

「謎かけか？つまらんど。」

「相手に自分の手札を晒すわけないだろ？」

違ういな。

ロト・ドラゴニクスは会話をしながら此方を警戒しつつ、左腕のナイフを抜く。

そして、

「な！？」

馬鹿な！傷口が再生していく！？

「貴様！！吸血鬼だったのか！？」

「いや。俺は^{ホムンクルス}人造人間の一種でな。」

はあ！？^{ホムンクルス}人造人間だと！？

「ありえん！！！！」

それを聞いて、ロト・ドラゴニクスは今度はニヤリと笑った。

side out

side ロト

「ありえん！！！！」

ほお、そう言っちゃうか。

「 ない、なんて事は“ えない” ぜ」

「……………」

いやー言っちゃったよ名ゼリフ。

「 吸血鬼のお前も、魔法使いも実際はお伽噺の様な存在だろ？」

ぬらりひょんとか狼男とか居そうだし。

「さて、お話は終わりだ。続きを……………ん？」

コイツ右目で見ると、ぼやけて見える。

まさか幻術か？いっちょ試して見るか……………。右手をエヴァンジェリンに向けてかざす。その行動を見て身構えるがもう遅い。

「《凍てつく波動》」

「「な!?!」」

波動によって全ての付加効果が解除されて、エヴァンジェリンと俺、双方から驚きの声が漏れる。

「き、貴様！！なんの魔法だ！？何をした！？」

エヴァンジェリンは波動によって幻術が解除された事に驚いている。

おーおーずいぶんテンパってやがる。

俺は、幻術が解除された本来の姿に驚いた。

「外見ガキかよ……………」

ますます、やる気でねえ。

「なっ！！これでも貴様より400年は生きてるわ！」

「遠マワシニ、外見ハガキダツテコト認メテルナ御主人」

「チャチャゼロは黙ってる！！！」

ケケケケケと人形が笑ってそれを少女が怒鳴ってる。シュー
ルだ。

「あー俺、帰っていいか？」

「なっ！！貴様！！私を狙って来たのじゃなかったのか！！」

「ナンダヨ。モット斬リアオウゼ。」

「いや。俺子供に手を出したくないし。」

「私は大人だ！！！！」

そう言ってる奴に限って子供なんだよ。あーシリアスがぶち
壊した。壊したの俺だけど。

「興醒めだ。帰る。」

「貴様！！そう易々と帰すと思ってるのか！！」

「ケケケケケ」

エヴァンジェリンが魔法の詠唱に入り、人形が斬りかかろうとするが遅い。

「じゃあな。《レムオル》」

「「!？」」

レムオルは光の当たり具合を調節して自分を透明にする。気配や魔力さえ遮断するからある意味最強の呪文だ。まあ、物音は普通に立つし、透明化したら攻撃は出来ないっていう欠点はあるけどな。とりあえず、魔法世界に帰るか。ドランを迎えに行かなくちゃ。

side out

side エヴァンジェリン

「クソッ!! なんだったんだアイツは!!」

捕まえるって言って現れて、自分が^{ホムンクルス}人造人間だと言ったり、幻術解いたり引っ掻き回すだけ引っ掻き回して帰って……!!!!

「今度会ったら許さん!!!!」

「ケケケケケ　ズイブン楽シソウダナ、御主人。」

全然楽しくない！

side out

第四話（後書き）

という事で、エヴァとの戦いでした

感想や意見、アドバイス等頂けたら嬉しいです

第五話（前書き）

大戦期前最後の話になります

では、どうぞ

第五話

side ロト

今、ドランを迎えに行つて、エヴァンジェリンを捕まえる依頼を受けたギルドに失敗を告げてから今夜泊まる宿を探しているんだが、

「何だかなあ……………」

簡単に言うと、賞金稼ぎが遣りにくくなった。

現在もフリーランスの賞金稼ぎとしてやっているが、“隻眼の龍騎士”など割と有名になったので、あちこちのギルドから勧誘が来ている。別に何処かのギルドに入って問題は無いが、自由に動きたい時に動けなくなるなど俺からするとデメリットも多い。

賞金稼ぎを辞めても数年は生きていける貯蓄はあるが、この年で隠居生活はゴメンだし何よりもせっかく貰った力だから、何かに活かして行きたい。

「うーむ……………」

ここまで考えてふと、妙案が浮かんだ。

「自分でギルドを作ればいいじゃないか。」

なんで気付かなかった……。

で、

思い立ったが吉日と、その日のうちにギルドの創設をヘラス帝国に申請して数日後、回答が有り創設の許可が出た。しかも、ギルドの本拠地建設場所もヘラス帝国首都に作りドランの為のスペースも設けてくれるだと。

ギルドの名前は《アレフガルド》にした。自分の名前も“ロト”にしたので、ね。

あと、ギルドマークはウロボロスと一緒にの形だ。

余談だが、“龍の騎士団”とかどうかと、申請しに行った時に申

請書を受け取った人に言われた。

まあ、“賞金稼ぎ”であって“騎士”じゃ無いので却下したかな。俺のファイトスタイル殆ど騎士や剣士と似たようなモンなんだけどね。隼の剣の見た目がそんな感じだし。

閑話休題

それで、申請自体は許可されたんだが何故か皇帝陛下に召集されて謁見する事になった。

なんかしたつけ……

コンコン

「準備が出来ました。陛下がお待ちです。」

城へ行くと、待ち合い室の様な場所に通された。暫く待っていると準備が出来た様で、ノックをして衛兵が声を掛けてくれた。

恐らく皇帝直属だろう。立ち振る舞いに気品が感じられ、実力も確かなようだ。

「此方に。」

「失礼します。」

衛兵に扉を開けてもらい中に入る。

そして、扉の向こうに居たのは、式典等で何度か見たことの有るヘラス帝国皇帝ご本人だった。

「お初にお目にかかります。私が、今回ギルドの設立を申請させて貰ったロト・ドラゴニクスです。」

礼儀作法はいまいちわからないが、跪いて口上を述べる。

「うむ。楽にして良い。顔を上げよ。」

「はっ。」

うお……………！言葉一つ一つに威厳を感じるな。

「噂は聞いておる、ロト・ドラゴニクス。賞金稼ぎとして黒龍を従えておるそうじゃないか。あっぱれじゃな。」

「勿体なき御言葉です。」

そう言ってホッホッホッと朗らかに笑うが、次の瞬間には顔を引き締めた。どうやら本題のようだな。

「それで、本題なんじゃが、ちよいと帝国の為に働いてくれんかの？」

「は？」

思わずそんな声が出てしまった。

「いやいや。今すぐには言わんよ。ここ最近連合との関係が悪くなってきたの……………」

と、最後まで言わず言葉を濁す。成る程。この人意外とタヌキだ。だからあんな好条件でギルドが創設させてくれるのか。貸しがつつてコトだな。

「私で良ければ、何時になるか分かりませんがお受けいたしましたしゅう。」

「構わん。助かる。」

話はこれで終わりだった。

さて、次はギルドの人員募集だ。これから忙しくなるぞ……………！

side out

side ヘラス帝国皇帝

「ふう……………」

今さつき面会した相手、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクス。依頼の成功率は八割強を誇りる賞金稼ぎで、失敗したケースの賞金首は大抵、理不尽な理由や、濡れ衣の疑いがある者ばかり。恐らく見逃したのであろう。

実際に会ってみて顔を見たが誠実そうな顔立ちの青年だった。人間的にも信頼出来そうなので、帝国の為に頼んでみたが快く承諾してくれた。

「テオドラの護衛でも頼むかの。」

あれはじゃじゃ馬だ。少しでも年齢が近い人を据えたら幾らか大人しくなるだろう。

最近、身の回りの近衛の兵士の入れ替えが度々ある。何か大きな事が近く、起きそうじゃな…………。

s i d e o u t

s i d e ロト

“ 隻眼の龍騎士 ” がギルドを立ち上げると聞いてか、随分多くの人員が集まったみたいだ。

ギルドメンバーの選抜は俺が直々にやっている。他の人に頼んでもいいが、将来仲間になる面子だ。自分でやりたい。

ギルドへの入団試験は皇帝陛下にコロシウムを使って良いと言われたので、そこを借りて何日かに分けて、やっている。

入団試験は費用は無料、試験の内容は俺と戦って“ 納得させる ” だ。中にはミ―ハーな連中や冷やかして来たようなのも居たが、いい腕の奴も集まっている。

チャキ

「ま、参りました。」

「うん、いい戦いだつた。次！」

「次は僕だよ。」

相手の首に隼の剣を当て、降参をしたのを聞いて次を呼ぶと、出てきたのは、赤と白で纏められた様な貴族の様な服を着て羽の刺さったハットを被った金髪の優男。

コイツは……確か“赤き貴公子”って2つ名が付いている奴だ。どっかのギルドに入ってた筈だが……わざわざ抜けたのか？

コイツの登場で周りで見ていた人々もどよめく。

「隻眼の龍騎士を相手に試合が出来て、僕は光栄だよ。」

「御託はいい。さっさと始めるぞ。」

お世辞を聞き流して、隼の剣を構えて促すと、相手も黙って杖を構えた。それでいい。

「初手は譲ろう。掛かってこい。」

「お言葉に甘えさせてもらうよ ルック・ルックス・ルッキン
グ もののみな 焼き尽くす 浄北の炎 破壊の王にして 再
生の徴よ 我が手に宿りて 敵を喰らえ 紅き焰!!」

「《バギマ》」

“赤き”と言うだけあって炎の魔法で攻めてくる。てか、始動キ
ーにセンスが感じられねえ……。バギマで相殺して、体勢をな
るべく低くして肉薄すべく疾走する。

「炎の射手 連弾 69の矢!!!」

牽制に矢で段幕。悪くは無いが……。

「甘い。《爆裂斬》」

「なっ!!」

隼の剣にイオ系の魔力を込めて振るうと、爆発を起こして炎の矢

を薙はらう。

慌てて次の魔法を詠唱しようとしているが、もう遅い。純粹な脚力だけで接近して首に剣を当て、終了。

「参ったよ、流石だね君は。」

じゃあ、試験の結果を楽しみにしてるよ。」

そう言い残してさっさと、去っていった。

まあ、強いっちゃそこそこ強いが、アイツは不合格だな。

「次！」

気を取り直して、次を呼ぶ。

「はっ！アラン・サントハイムです！！」

「！！……よろしく」

出てきたのは質素な身なりだが、それなりに体格のいい男。魔法剣士タイプか？

まあ合格、だな。

ここで正直に言ってしまうと、合否の判定は殆ど最初に付けている。

見るのは“目”だ。

こう長年、賞金稼ぎをやっていると、目を見ると本質的な部分がわかってくる。

それで、まだ実力が無くても誠実な奴とかを選抜している。

因みに、さっきの奴は軽薄で自分の身が危うくなると保身に走る様なタイプだな。

「それでは、行くぞ！」

「はっ！」

ひとまず、考えるのを止めてアランと向き合う。

「行きます！」

アランが一声上げて魔法の詠唱に入る

こうして、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクスを初代マスターとする賞金稼ぎギルド《アレフガルド》が設立。
魔法世界大分裂戦争15年前の出来事だった。

第五話（後書き）

次回は設定を載つけます。

感想や指摘、要望等気軽によろしく願いますm——m

設定（前書き）

設定です

筆者としてはかなり練りこんだつもりです

設定

名前：ロト・ドラゴニクス

性別：男

種族：人造人間
ホムンクルス

容姿：黒い短髪に、切れ長の紅い目。右目は眼帯をしてる。イメージとしてはBLEACHの黒崎一護。

性格：比較的思考深いが、偶に思い付いた事を直ぐ口に出したり、行動したりする。

賞金稼ぎという職業に誇りを持ち、義理がたい。また、少し口が悪い。面倒見がよかったりする。

F a t e 風ステータス

- ・筋力：B -
- ・耐久：D
- ・敏捷：A +
- ・魔力：A
- ・幸運：C +

固有スキル：

王者の眼

ウロボロスの印がある右目で、気や魔力、風の流れ等が見える。魔力が見える為、幻術や認識阻害の魔法も見破れる。飛んでくる銃弾の回転してる様子がはっきり判るレベルで、モノを“見る”という点では最強。

左目は動体視力がいい只の目

呪文

魔法が使えない代わりに使える。

呪文適正は

メラ デイン>ヒヤドゥイオ ギラ>バギ>ドルマ となっている。

回復呪文は不得手で、蘇生呪文は使えない。補助呪文は効果は自分自身にしか反映されないものが多い。

フィールド呪文も使える。

備考：

人間をベースにした人造人間ホムンクルスで身体能力は非常に高い。

身体には賢者の石が埋め込まれていて、これにより肉体の再構築が可能。再構築の速度や優勢部位、有無は本人がある程度制御可能。しかし、再構築の最大速度は本来の人造人間より遅い。

また、賢者の石によって加齢も抑えられており、内包する賢者の石を消費し続けると加齢速度が上がっていき、賢者の石を使いきると加齢速度は、極一般的な人間と一緒にになる。また、気は使えない。

魔力量はドラクエ風に表記すると、500前後。因みに、ナギは400程度、木乃香は600強。

名前：ドラン

種族：黒龍

ロトに雛の頃に助けられ、以来行動を共にしている龍。

基本的におとなしい性格で、人を背中に乗せる事を嫌悪しないく、専らロトの移動手段になっている。

戦力としても申し分なく、火球を放って攻撃や、翼で大風を巻き起こしての牽制や体当たりなどする。

呪文について

ロトが使う呪文は、魔法とは異なる。

メリット、デメリットとしては、

・詠唱が極端に短い。

・発動まで呪文の種類がわからない。

・魔力消費量が多い。

・魔法障壁が存在しない

・発動媒体（杖）が必要無い

など。

呪文適正と呪文の関係は適切が低ければ低い程、使用するとき効果が弱かったり消費魔力が多くなる。

呪文自体の強さは、勇者特有の呪文であるライデイン・ギガデインが最強で次点でイオ系その後はドルマ>ギラ>メラ||ヒヤドバギとなる。

攻撃呪文は

メラ メラミ メラゾーマ

ヒヤド ヒヤダルコ マヒヤド

ギラ ベギラマ ベギラゴン

ライデイン ギガデイン

ドルマ ドルクマ ドルマドン

と変化する。

設定（後書き）

仮契約カードは本編で載せます

感想や意見、要望等あったら気軽に寄せください m () m

第六話（前書き）

もう一話投稿

あとがきにアンケートあります

第六話

side
ロト

《アレフガルド》を作って、14年。俺はアラン（アラン・サントハイム）にギルドを一時的に預けて、魔法世界をドランと一緒に回った。

ギルドを抜けると表明した時はメンバーからなぜ抜けるのかと、口々に引き留められたが旅をしたいと言ったら“まだ若いんだから世界を見て、色々な人と関わって来い”と暖かく送り出してくれた。嬉しくて涙が出た。

アランはギルドに入ってからメキメキと頭角を表してギルドのメンバーからも慕われていたので、ギルドを渡して安心して旅に出れた。

旅に出た理由としては、皇帝陛下がおっしゃっていた様に最近、帝国と連合との関係が益々悪化してきて、戦争になる前にゆっくりと旅行したかったからだ。

それに、アランには二代目ギルドマスターに成ってもらったつもりなので研修みたいな感じでちょうど良い。

そして、ギルドを抜けて1年程経った頃、帝国は連合と戦争になった。

俺は、皇帝陛下から“借り”の内容が戦力として戦地に行ってくれ、という内容だとずっと思っていた。

だけど、陛下からの頼みは「第三皇女の護衛をしてくれ」というものだった。なんで俺に？とも思うが戦争の手助けをしてくれと言われるよりずっと楽なので快よく受諾した。

そういえば第三皇女って式典とかで見たことないな、とか考えながら、謁見の間に通されて暫く待っていて勢いよく扉を開けて遣ってきたのが

「お主が“隻眼の龍騎士”のロト・ドラゴニクスか！？サインが欲しいのじゃー！」

このチンチクリンだった。

「んー…あー……。えっと、お嬢ちゃん？俺は訳あって第三皇女の特オドラ様を待ってるんだ。サインならやるから、後にしてくれないか？」

とりあえず、頭を撫でながらやんわりと注意してみるが……なんかムツとしてる。

「私が第三皇女のテオドラじゃ！」

「おいおい、俺にそんな冗談は通じねえよ。本物の皇女様に失礼だろ？」

「妾が！本物の！テオドラじゃ！！！！」

「そうか。それは凄いな！」

「うーっ！」

何やら涙目になって来たので、扉のところで佇んでいる衛兵に目で確認すると、苦笑しながら首肯された。

まさか………！

「……………本物？」

「さっきからそう言って居るじゃろう！！」

マジか。

「あー……申し訳ありませんでした。」

とりあえず、跪いて非礼を詫げる。自分よりちっこい奴に敬語って物凄くむず痒くなるな。

「はあ……もうよい。話し方も普通にしてい。」

ほっ、助かった。

「まあ、改めて紹介させて貰うが、お前の護衛を頼まれたロト・ドラゴニクスだ。ロトでいい。よろしくなテオドラ皇女様。」

「よろしくなのじゃ。妾はテオでよいぞ！」

そう言っ、テオは嬉しそうに笑った。

side out

side other

「んじゃ、非礼の詫びに何か一つ願いを聞いてやろつ。」

無理な願いは勘弁など、付け加えてロトがテオドラに言う。テオドラは少し思案したあと、ニヤリと笑った。

「ゆっくりと城の外をゆっくりと回りたいのじゃ!」

「おし、わかった。」

「…………へ?」

テオドラとしては冗談半分で言った事だったが、すんなりとOKを貰えるとは思っていなかったなので呆然となった。

皇女の身であるテオドラは稀に城から出られる時は何人もの護衛が付いていて、窮屈で仕方なく店の人々も畏まってしまってうんざりしていた。

「それだったら、どうするのじゃ?」

「じつするんだよ。」

そう言い放つと、ロトはふくろから一本の杖を取り出すとテオド

ラに向かって振るった。

「《モシヤス》」

「おお！？おおおお！！！」

ロトが杖をテオドラに向かって振ると、テオドラの姿は扉の所にいる衛兵と声も顔かたちも瓜二つになっていた。

このロトが振った杖は、“モシヤスの杖”と言って通常の場合、唱えた術者にしか効果の無いモシヤスを杖に術式を組み込んだ特別な杖だった。しかも、変化する対象を選べて、アーティファクト以外の変化した人物の能力を継承出来るという、なかなかえげつない代物である。因みに効果がある時間は3時間だ。

「これは凄いのじゃ！！ロト！凄いのじゃ！！！」

「おい、テオ。落ち着けよ。」

何やら興奮しているテオドラにモシヤスの杖の効果の説明する。時間に限りがあると聞いてテオドラは焦り始める。

「時間に制限があるなら急ぐのじゃ！！！」

ロトの手を引き、テオドラは急いで城を出る。今更ながら、テオドラの口調で男が喋ると凄まじく奇妙である。

「ロト！！これは何なのじゃ！？」

「だから大声だすな。」

あーっとこれはな………っていねえし！！」

「ロト！！早く来るのじゃ！」

色々な物に目移りするようで、テオドラは大声でロトを呼びながら走り回るテオドラ。

しかし、本来のテオドラの姿であれば微笑ましいのだが、今の見

た目は大の男であるから奇怪だ。さらに、何やらクスクス笑われているようである。

本人であるあの衛兵がここを歩くときは苦勞するであらう。

……合掌。

「ロト!!早くするのじゃ!!」

「ハイハイ……………」

とりあえず、思考することを放棄してじゃじゃ馬の対応をする事にしたロトだった。

side out

side ロト

「なに?アレフガルドに行きたい?」

「そうじゃ!!」

何を言いだすかと思ったら…………この皇女様は。

「別にいいが、面白い所じゃねえぞ？」

「いいのじゃ。お主のギルドがどんな所か見てみたいのじゃ！」

「……………じゃあ行くぞ。」

俺が初代マスターであるアレフガルドは、ドランが待機出来る場所の問題もあり、街の外れにある。ギルドメンバーは良い奴ばかりだが、仮にも皇女であるコイツが入ったりしていいのかどうか……。

「ロトさん！？お久しぶりです！」

「ロトだって？」

「おお、一代目じゃねえか！ー！」

「久々だな！一代目！」

「一代目！！元気だったか？」

「おう、久々だなお前ら。」

アレフガルドに入ると、ロビンを筆頭にメンバーから声を掛けられた。てか、一代目ってヤクザかよ……。そういえば、最近全然顔出してなかったな。

「それで、本当にどうしたんですか？……後ろの方は？」

「コイツが俺のギルドが見たいって言うてな。テオ、モシャスを解除していいぞ。」

「わかったのじゃ。」

テオが本来の姿に戻るとギルドの面々が誰だか判らずに頭をひねる。そういえば、コイツは余り外部に知られてなかったな。

「あゝコイツは第三皇女の特オドラだ。」

「そうじゃ！妾が、ヘラス帝国第三皇女、テオドラじゃ！」

『『『『『な、なんだって！？』『』『』『』』

テオドラが薄っぺらい胸を張りながら、言い放つと全員びっくりしてる。

さすがに、これはコイツらもびっくりするか。お、この飲み物貰うぜ。

「一代目が恋人に皇女を連れてきたぞ！！」

「ぶふっ！！！」

「『『『『うおおおお！！！！』『』『』『』

「こ、恋人かの／＼／」

「しかも、幼女だ！」

「ロリか。」

「ロリだな。」

「一代目の趣味に文句付けんなよ。それより宴だ！」

おい！！なんでそうなる！？不意打ち過ぎて噴いちゃったじゃねえか！俺はロリじゃない！！そして、テオは赤くなってモジモジしてないで何か言え！！

テオとの恋人発言の誤解は解いたが、皇女が来たという事で結局お祭り騒ぎになっている。テオも混じって騒いでいるが、メンバーの誰かが“俺も軍で帝国の手助けをするぜ”と言ったら、顔に陰がさした。お祭り騒ぎで忘れていたが戦争が始まっているのだ。

余談だが、帝国に籍を置いているギルドには連合との戦争への協力申請が来る。もちろん、戦争で死ぬ確率も高いので参加は自由だが、終結後は多額の報酬が約束されている。しかし、ギルドとしては貴重な人材が失われるかもしれないので、従軍を全面的に禁止しているギルドもあれば、受け取る報酬の一部を納めるのを条件に

許可しているギルドもある。

因みに、アレフガルドは個人の自由にしている。このギルドを創設した、俺が陛下からの依頼で戦争の手助けをする可能性があるからな。

「ロトさん!」

「アランか。どうした?」

「いえ、ロトさんが帰って来たんだから久々に“稽古”でも付けて貰おうと思って。」

「ほう。」

ロビンのその発言に俺の口元が吊り上がる。

「一代目と二代目候補が“稽古”するらしいぞー!」

「「「「オオオオオ!」」」」

「???」

話を聞き付けて、周りの連中も盛り上がってきた。事情がわからないテオが困惑してるな。

「ロ、ロト？ “稽古”とはなんなのじゃ？」

「見れば判るぜ。」

俺は盛り上がり若干ビビってる様子のテオにニヤリとしながらそう答えた。

この時の笑みは“イイ笑顔”だったと自分でも思う。

「いきますよ！ロトさん！」

「っしやあ！バッチコイ！！」

ギルドにある闘技場で俺とロビンは対峙していた。

俺はいつもの隼の剣を装備し、ロビンはトンファーと魔法具？の指輪を着けている。

ぶっちゃけて言うと“稽古”とはウチのギルド特有のイベント（

？）で、実質限りなく実戦に近い模擬戦だ。実戦に近い戦いで経験も積めて、回復役の奴の練習にもなるので頻繁にやっている。我ながら良い案だったと思う。

閑話休題

ルールは簡単。相手に参ったと言わせるか、気絶させるまで続行するシンプルなモノである。

ロビンもこれで実力を付けたので効果（？）も折り紙付きである。

「今日こそ勝ちます！！」

「やってみろ！！」

開始の合図なんてものは無く、自分達で始める。

ロビンは声を上げたと同時に駆け出し、俺もそれに習って疾走する。

「そらそらそらア！！！！」

「くっ！貴方の剣撃は相変わらずッ！！！！」

「うおっ！？」

「ちっ！ルド・ル・ドルフ・アドルフイ 来たれ雷精 風の精 雷
を纏いて 吹けよ 南洋の嵐」

アランの得物であるトンファ―は棒の長い部位で防御をし、短い部位で突く、長い部位で遠心力を使いながら尻ぎ払う等の攻撃を主体とする攻守一体の武器である。

しかし、剣との間合いの違いから必然的にアランは捌く側になる。隙を突いて俺の懐に入り込み棒の長い部位で突を繰り返すが、俺は上体を反らし、そのまま後ろへ爆転しながらマルチタスクを使用して呪文を発動させる。

「 雷の暴風！！」

「 《ライデイン》！！」

雷と雷が衝突し、爆発を起こす。しかし、アランは感覚で俺の位置を把握し、煙幕を切り裂いて俺に肉薄する。

「腕をつ！上げたなっ！！」

「当たりっ！前ですっ！ロトさんの代理でっ！かなり高額な依頼を！こなしましたから！！」

斬り結びながら、アランと会話をする。本当にコイツは腕を上げた。

ガキンッ！！！！

「ロトさんっ！これでケリを付けましょう！！」

「おうよ！ドンと来い！！！！」

アランの突きと俺の袈裟斬りが真正面からぶつかり、お互いに吹き飛ばす。武器の腕での勝負は付かないと判断したアランが魔法で勝負を持ち掛けてきた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

アランが火の最高位呪文を詠唱し、俺は最大焦熱魔法を放とうと魔力を貯める。

アランの魔法適正は雷と火でかなり威力の高い魔法が放てる。雷と火では火の方が適正は高かった。

「燃える天空！！！！」

「《ベギラゴン》……！」

炎と焦熱は圧倒的な炎熱を生み出しながらぶつかり合う。
しかし、その均衡は数秒で崩れ去り炎は焦熱に飲み込まれた。

「くっっ！！最大障壁！」

「燃える天空を修得したのは褒めてやるが、まだまだ未熟だな
チエックメイトだ。」

「やはり、燃える天空はまだ未完成ですかね……参りました。」

アランは炎熱の奔流を障壁で防ぎきつたが、それ以降の行動には
対応出来ずに俺に首を取られてしまった。

アランが降参したことにより、この稽古は俺の勝ちに終わった。

「ロトよ……。」

「ん？テオか。どした？」

再び始まったお祭り騒ぎを隅でちびちび飲みながら、眺めていると何時の間にか抜け出てきたテオが傍にいた。

「ここは……いいギルドじゃな。」

「だろ？自慢のギルドだ。」「このギルドの面々を戦争で死なすのは嫌じゃ。ここの人だけでは無く、街の人々も！」

「……………」

「一刻も早く、戦争を終わらせるぞ。」

「……………ああ。」

テオは決意を固めたようだ。それなら俺が手助けしなくては、な。

side out

s i d e o t h e r s

その夜、城の一室を借りて寝泊まりしているロトの元に一人の客人がいた。

「誰だ？お前。」

「そう殺気立たないで欲しいな。僕は只、勧誘に来ただけだよ、
“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクス。」

「夜に突然、部屋に入ってくるのは夜這いか襲撃と相場が決まっているだろう。んで、名を名乗れ」

「それは失礼した。僕の名前はフェイト・アーウェルンクスだよ。」

ロトの切り返しに苦笑する様子を見せながら、フェイト・アーウェルンクスは名を名乗った。

「F a t e 《運命》ねえ……。んで、勧誘の内容は？」

「世界を救ってみないかい？」

F a t e 《運命》の担い手はそう言い放った。

第六話（後書き）

最近なんか戦闘シーンばっかだな……

突然ですが、ヒロインを募集します

ヒロインはテオドラ＋麻帆良勢から4人〜6人程で考えています

一人二票で、ヒロインにしたいというメンバーに入れてください

ユーザーでない方も感想を書けるので、気軽に投票をお願いします
m () m

期限は10月27日の0時までです

よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0106x/>

ネギま！ 龍騎士が行く

2011年10月9日13時38分発行